Good Practice Story Title：タイトル
守り続けた海岸、奇跡の再生
Destination : Mitoyo, Kagawa 観光地:　香川県三豊市 Country : Japan 国：日本 Submitting Organization: Mitoyo City Office　申請団体：三豊市役所 Category: ☒Destination Management 観光地マネジメント ☐Nature & Scenery 自然景観 ☐ Environment & Climate 環境と気候 ☐ Culture & Tradition 文化と伝統 ☐Thriving Communities 地域活性化 ☐ Business & Marketing ビジネスとマーケティング

Destination description: 地域について
三豊市は、四国・香川県の西部に位置し、瀬戸内海を望む荘内半島と島々、里山に囲まれた美しい地域です。 父母ヶ浜（ちちぶがはま）は、その三豊市にある南北 1 キロにわたる長い砂浜が続く遠浅の海岸です。干潮時には砂浜にできる潮だまり(みずたまり)に空は反射し、まるで天空の鏡のような景色に出合うことができると話題になっています。 父母ヶ浜は、昔から地形的にも珍しい遠浅の浜辺として地元の子どもたちの格好の遊び場でした。四季折々の海の表情や沈む夕日の美しさを目にしながらの通勤や通学。大人も子どもたちも、日常の風景としてこの海岸を愛していました。 しかし、1994 年頃の父母ヶ浜は現在のような美しい海岸ではなく、瀬戸内海中のゴミが流れ着く海岸で、砂浜は常に海ゴミが散乱している状態でした。そのため工場誘致のための大規模な海岸の埋め立て構想が進んでおり、海岸消滅の危機に直面していました。

Summary of Good Practice Story: 優良事例（グッドストーリー）概要
この海岸は、1 枚の写真をきっかけに、年間来訪者数が 5,500 人から 6 年間で約 100 倍の 50 万人へと増加した奇跡の場所です。

世界中には写真映えする観光地が数多くありますが、父母ヶ浜は単なる撮影スポットにとどまらず、地域コミュニティを巻き込んで観光産業を育て、地域経済に希望をもたらしました。その背景には、かつて海岸埋め立ての危機に立ち向かった地域住民の姿があります。

自然消滅の危機にあった海岸が、地域の力で再生され、観光地として生まれ変わった事例は非常に稀です。さらに、観光客に対して地域の取り組みの意義を伝える啓発活動や募金活動を通じて、環境保護と経済成長の両立を図るシンボル的なモデルケースとなっています。

Issues faced: 直面する課題

父母ヶ浜が注目される以前の 2017 年まで、三豊市は主産業である製造業や農業が衰退し、新たな産業の芽も見えない状況でした。人口は減少の一途をたどり、約 7 万人から 2045 年には約 4 万人まで減少すると予測されており、人口流出も深刻な課題となっていました。

有名な観光地も少なく、知名度の低い三豊市では、多くの住民が自らの故郷の価値に気づいていませんでした。

父母ヶ浜も例外ではなく、地元住民にとっては馴染みのある海岸であったものの、瀬戸内海から漂着するごみが多く、その価値は十分に認識されていませんでした。そうした中、1994 年ごろに浮上した工場誘致に伴う海岸の埋め立て計画に対しても、多くの住民が関心を持たず、海岸は埋め立ての危機に何度も直面していたのです。

Solution: 解決策

父母ヶ浜の埋め立て危機を救ったのは、他でもない地域の住民たちでした。「一度埋め立てられたら、二度と戻らない」——そう感じた人々が、“ささやかな抵抗”として始めたのが海岸清掃です。地元の漁師をはじめ、さまざまな職業の人々がこの海岸を守ろうと立ち上がり、ボランティア団体「ちちぶの会」が結成されました。

晴れの日も、雨の日も、雪の日も、彼らはごみを拾い続けました。その強い想いは少しずつ周囲に広がり、やがて埋め立て計画は中止になりました。美しい海岸は守られ、現在の父母ヶ浜へとつながっています。計画が中止された後も清掃活動は続きました。

なぜなら、自分たちの手で故郷が美しくなる喜びがあったからです。

そして、この自然を未来の子どもたちに残したかったからです。

この海岸を開発の危機から何度も守り続けてきた「ちちぶの会」の活動は、25 年以上経った今もなお続いています。そして、彼らの努力が実を結び、父母ヶ浜が脚光を浴びるまでには 20 年という歳月が必要でした。

転機は 2017 年、地域の観光協会が開催した写真コンテストに応募された 1 枚の写真でした。

潮だまりに空が鏡のように映り込む幻想的な光景——昔から変わらない自然の姿でありながら、それまで誰も「魅力」として気づいていなかった父母ヶ浜のもうひとつの表情でした。

観光協会はこの写真の可能性に着目し、積極的に発信。これがきっかけとなり、来訪者はわずか 6 年で約 100 倍に増加しました。

こうして地域が守り続けた父母ヶ浜は、多くの人を惹きつける観光地へと変貌を遂げ、関連施設やサービス、雇用が生まれ、三豊市で初めて「観光産業」という新たな産業が誕生しました。

Methods, Steps, and Tools applied: 手法、ステップ、活用したツール

1. SNS を活用した魅力の発掘と情報発信
地域の観光協会は、いち早く父母ヶ浜の魅力に気づき、地元のアマチュアカメラマンと連携。来訪者が「水鏡の写真」を確実に撮影できるよう、潮位や天候、光の条件などを研究し、最適な撮影タイミングを SNS で発信しました。

2. 地域事業者とコミュニティの連携
長年清掃を続ける「ちちぶの会」の姿勢に共感した地域事業者が増加。プラスチック削減の取り組みとして、紙ストローの導入やプラスチックカップの廃止など、環境に配慮した店舗が次々に生まれました。

３. 観光産業の発展による地域経済への貢献と移住者の増加
父母ヶ浜の来訪者数が安定して増加したことで、地域に新たな経済循環が生まれました。宿泊施設は 6 年間で 28 軒から 65 軒へと拡大し、飲食店や物販、アクティビティなどの関連事業も急成長。これにより、観光が地域の基幹産業のひとつとなり、雇用の場が広がりました。
また、都市部からの移住者が少しずつ増加し、空き家を活用した宿や店舗の

開業なども進んでいます。人口減少が課題となる中で、観光による持続可能な地域再生のモデルが生まれつつあります。

4. 父母ヶ浜協力金制度の導入
2023 年には、海岸保全の啓発と支援のために「父母ヶ浜協力金制度」を開始。現地の看板や WEB サイトで「ちちぶの会」の清掃活動や海岸の保全活動の意義を伝え、来訪者に募金を呼びかけています。
協力金で集まった資金は、清掃道具や海岸の動植物調査、環境保全の教材づくりに活用されています。動植物調査結果をまとめた「環境学習 BOOK」は、来訪者だけではなく、地域の小中学校の子どもたちにも配布されています。

Achievements and Results: 取組成果

1. 宿泊施設と観光消費額の急増
地域住民、ボランティア、宿泊・飲食・体験事業者が連携して受け入れ体制を整備した結果、三豊市内の宿泊施設は 6 年間で 28 軒から 65 軒へと倍増しました。
2022 年には、もともとゼロに近かった観光消費額は、父母ヶ浜を目的とする来訪者により年間 52 億円に達し、地域における観光産業が本格的に誕生しました。

2. プラスチック削減への意識の高まり
父母ヶ浜を守る「ちちぶの会」の活動に共感した地域事業者の間で、紙ストローやリユース容器の導入など、プラスチック削減への取り組みが広がり、環境に配慮した観光地としての意識が高まりました。

3. ボランティア活動の広がりと住民意識の変化
かつてはその価値に気づかれなかった父母ヶ浜ですが、多くの来訪者から「美しい」「奇跡の絶景」と称されることで、地域住民があらためて自分たちの故郷の魅力を再認識するきっかけとなりました。

この変化を象徴するのが、1996 年に 7 名で始まった海岸清掃活動「ちちぶの会」の広がりです。活動は共感を呼び、現在では 250 名以上が登録。親子連れや移住者、観光客や地元の小学生も参加し、世代を超えて環境保全意識が高まっています。

「自分たちの手で守ってきた海岸が全国から注目されている」という実感は、地域への誇りと主体性を育み、行事や環境活動にも積極的に関わる住民

が増加。後継者不足の課題も克服され、活動は持続可能な形へと進化しています。

４．地域と来訪者がともに守る観光地モデルの構築
2023 年には協力金制度が導入され、来訪者が海岸保全に寄与できる仕組みが整備されました。地域住民と観光客が協力して自然を守る「共創のかたち」が生まれ、地域と来訪者の新たな関係性が築かれています。

Lessons Learned and Advice: 教訓/アドバイス

1. 限りある美しい景観を守るために
美しい景観を守る第一歩は、「自然は無限でも当然でもない」という認識を地域住民が共有することです。自然を次世代へ残していくためには、地域が持つ本来の価値を正しく理解し、その重要性を住民一人ひとりが正しく認識することが不可欠です。

2. 住民の理解と継続的な取り組みが成果を生む
三豊市では、地域住民やボランティアが 25 年以上にわたり保全活動や海岸清掃を継続してきました。この積み重ねが、観光客の増加や地域の魅力向上といった目に見える成果につながりました。

3. 観光開発は「地域の中から」生まれるべき
地方自治体でも、地域資源を活かすことで観光地を生み出すことは可能です。大切なのは、地域コミュニティが観光開発に深く関与すること。地域の想いと行動があってこそ、観光客と地域社会の双方に利益をもたらす持続可能なモデルが構築されます。

4. 利用者の意識と行動が自然保全のカギ
自然を楽しむ側である観光客にも、保全への意識と行動の変化が求められます。「自然は守られるものではなく、共に守るもの」という意識を地域内外で共有することが、これからの観光の質を左右します。

5. 環境と地域の再生を両立させるモデルの重要性
父母ヶ浜のような取り組みは、「地域の再生」と「環境の再生」の両立が可能であることを示す好例です。今後もこのようなモデルケースを各地で構築していくことが、持続可能な観光の未来に不可欠です。